Vol. 2

〝芯〟以外は捨てる――

捨てる練習

文 弘兼憲史
text by Kenshi Hirokane

複雑に入り組んだ現代社会だからこそ、せめて自分だけはシンプルでありたい。シンプルに生きたいと考える人が多くなっています。

ぼくもそう思うし、シンプルな人、わかりやすい人に好感を持ちます。

それは、ぼくだけではないでしょう。

たとえば、AかBかの選択を迫られたとき、「あの人ならどちらを選ぶだろう？」「あの人の意見を聞いてみたい」と頼られるのは、ハッキリとした自分の意見を持っている人、つまり、わかりやすい人です。

相手によって態度を変える、その場その場で意見を変える、その日の気分によって人が変わってしまうような、複雑でわかりにくい人の意見なんて、誰も聞きたくありません。

最近はあまり耳にしませんが、「竹を割ったような」という表現があります。改めて辞書を引くと、「性質がさっぱりして、わだかまりがない。気性に陰険さや曲がったところがない」とありました。

いいですね。

シンプルな人の究極は、〝竹を割ったような人〟かもしれません。

多くの人は、そんな生き方に憧れを抱き、わだかまりがあって、陰険で、曲がった性格の人を嫌うのです。

では、シンプルでわかりやすい人と、複雑でわかりにくい人との根本的な違いは何でしょう。

それは、

「揺るぎない価値観」を持っているか、いないか
「ぶれない芯」があるか、ないか
「譲れない一線」を守れるか、守れないか――

ではないでしょうか。

ここに挙げた「揺るぎない価値観」「ぶれない芯」「譲れない一線」はほぼ同じ意味で、「何があっても、これだけは断固として守り抜く」という、〝自分が生きていくための原理原則〟と考えてください。

自分の根本＝中心にあるべきものですから、**「芯（コア）」**と呼ぶことにします。

シンプルな人には、ぶれない芯がある。

他人がいくら揺さぶっても、決して揺るがない強い芯を持っているのです。

その一方、芯にかかわりのないことには、まったくこだわりません。守り抜くものは、たった一つ。自分の芯だけでいいと考えているからです。

芯だけは守る、あとはどうでもいい――という潔よさが、わかりやすさ、シンプルさを生み出します。

そこでぼくは、「芯以外のものは、捨ててしまおう」と提案したいのです。

Profile

1947年、山口県生まれ。早稲田大学法学部卒業。松下電器産業（現パナソニック）に勤務後、74年に『風薫る』で漫画家デビュー。『島耕作』シリーズや『ハロー張りネズミ』『加治隆介の議』など数々の話題作を世に出す。『人間交差点』で小学館漫画賞（84年）、『課長島耕作』で講談社漫画賞（91年）、講談社漫画賞特別賞（2019年）、『黄昏流星群』で文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞（00年）、日本漫画家協会賞大賞（03年）を受賞。07年には紫綬褒章を受章。人生や生き方に関するエッセイも多く手がけ、『弘兼流60歳からの手ぶら人生』（海竜社）、『弘兼流やめる！生き方』（青春新書インテリジェンス）などの著書がある。

捨てる練習
プレジデント社
708円（税込）